

北社会ニュース 68号

2010年9月21日

発行者： 鈴木壮夫

(1) 本日、第285回 北社会

講師：中條克浪氏（高27回） 同窓会理事

仙台二高創立110周年記念行事実行委員会・同窓会委員

講演テーマ：「110周年記念事業について」

6月10日発行、同窓会報（平成22年度春季号）に創立110周年記念の御案内が掲載され、10月22日（金）、東北大学川内萩ホールにて、記念式典等が開催されることを知りました。北社会の会員の皆様にも大いなる関心を抱いていただき、何か協力できることがあればと願い、母校に電話連絡し、庄司恒一校長より本日の講師・中條氏をご推薦いただきました。ご快諾いただき、ご多忙の中、資料作成等ご準備いただきました。ご上京誠にありがとうございます。

(2) 小生（鈴木壮夫・高11回）にとって“二高”は『生きる支え』

私が二高生になれたのは、昭和31年（1956年）でした。入試が目前となった上杉山中の三学期、石原慎太郎氏が「太陽の季節」で芥川賞を受賞、障子を突き破った等と不安をやわらげ受験しました。その年の経済白書には『もはや戦後ではない』と規定され、敗戦の気持を少しは切り替えられた時期だったかもしれません。

二高生になり帽子を被って外出すると近所の皆さんが“あの子、二高に受かったんだ”と小声で話し合っているのが耳に入り、合格してよかったと思ったものでした。

高校生活は子供からオトコの端くれになったんだと実感して毎日の応援練習に参加しました。54年も経ったのに当時を鮮やかに思い出せるのは二高にとって大きな出来事が次々と起こったからでしょう。5月、榎有恒氏（中11回）が隊長を務めた登山隊がヒマラヤのマナスル峰（8125M）の登頂に成功し、日本社会が喜びに包まれた。評定河原球場での対一高定期戦も二勝一敗で勝利。外野席が女子高生でいっぱいになったことにはビックリした。そして、一番の思い出は野球部が福島・山形勢に勝って甲子園出場を成し遂げたことであった。入学の翌日、上級生との対面式で麻喜応援団長は「今年は甲子園に行くぞ！」と叫んだ。新入生は皆、関心を抱いていた。だから、昨秋に部員が7人になり、新入生が入部してやっと十数人になり、何とかゲームができるということを誰もが知っていた。内心、団長は何を言うかと気持は冷めていた。でも、急速に力をつけた野球部は幸運にも恵まれたが甲子園出場を成し遂げた。“希望を抱き努力を続ければ成し遂げられることもある” 小生の心の支えです！